

雑誌『国民文学』研究：〈理想〉の文学への道

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2016-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮, 松下, 玲音 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009309

雑誌『国民文学』研究

—〈理想〉の文学への道—

南 富 鎮
松 下 玲 音

1. はじめに

『国民文学』は、1941年11月から1945年5月の間に、朝鮮で月に一回刊行されていた文芸総合雑誌である。植民地期の朝鮮で、日本官憲の指揮下にあった出版業界が生み出したこの雑誌¹は、親日文学雑誌として紹介されてきた²。しかし個々の作品を見るなかでは、民族主義的で、抵抗を示す作品も掲載されているという評価もあり、一面的に親日、国策雑誌と見ることを再考する傾向も最近の研究から見受けられる³。本論では、作品を生み出す原動力となった、当時の文壇の文学に対する考え方を通して、ただ単純な親日雑誌という評価に集約されえない複雑さを持つこの雑誌の存在意義を考察する。

ここで、『国民文学』の基本情報を概観する。『国民文学』は、崔載瑞主宰の『人文評論』と李泰俊主宰の『文章』という朝鮮語による二つの文学専門誌が統合されてできた雑誌である⁴。この統合の理由は、「用紙節約」と、雑誌を統制することによる「朝鮮文壇の革新」の二つにあると崔は述べている⁵。

当初の雑誌の計画では、日本語版の創刊号（11月）以降の雑誌について、1月、4月、7月、10月の年4回は日本語版（国語版）、その他の年8回はハングル版を刊行する、とされていた。しかし1942年5・6月合併号にて、ハングル版撤廃を宣言し、それ以降は全てが日本語版となっている⁶。

雑誌創刊の1941年11月当時は、1941年12月8日に勃発するアジア・太平洋戦

¹ 人文社編『『国民文学』改題』『国民文学』（第十巻）図書出版亦楽、2001、ソウル、p.575

² 韓国史事典編纂会・金容権編著『朝鮮韓国近現代史事典 第二版』日本評論社、2006、p.309

³ 神谷忠孝「朝鮮版『国民文学』について」『北海道文教大学論集』10号、2009、pp.54-55

⁴ 人文社編、前掲書、2001、p.575

⁵ 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942.8、p.12

⁶ 人文社編、前掲書、2001、p.577

争の直前期であり、終刊となる1945年5月は日本の敗戦間近の時期となっている。よってこの戦時下雑誌は、戦争時のメディアならではの特徴的な性格を備えている。例えば、巻頭には「皇国臣民の誓詞」が載せられるという特徴がある。「皇国臣民の誓詞」とは、1937年10月2日に朝鮮で制定され、日常的に斉唱が義務付けられた文章である⁷。これには児童用と一般用の2種類あり、『国民文学』には「一、我等ハ皇国臣民ナリ、忠誠以テ君国ニ報ゼン。二、我等皇国臣民ハ互ニ信愛協力シ以テ団結ヲ固クセン。三、我等皇国臣民ハ忍苦鍛練力ヲ養イ以テ皇道ヲ宣揚セン」という一般用が載せられた。しかし、初めてのハンダ版である1942年2月号の巻頭にはこの掲載が抜けているというずさんさも見受けられる。また、この当時刊行されていた他の雑誌全般と同じく、戦争関連の広告が多い。囲碁や将棋の解説を載せるなどの大衆娯楽の要素は一切見受けられず、毎号、論文や小説が雑誌の大半を占めている。一時は『国民文学』の姉妹誌として『国民詩人』⁸を発刊するなど精力的に活動していたが、日本の敗戦間近になると毎号のページ数が減少するなど出版状況は厳しくなり⁹、広告は全く同じものが使いまわされるようになる。そして、雑誌が配給制になり個人注文での売買廃止¹⁰後間もなく、敗戦の約3か月前、1945年5月号をもって、何の前置きもなく突然雑誌は刊行を終えた。

この論で参考にしたのは復刻影印本であるが、実物には欠頁や休刊、発行されたのか不明な号などがいくつかある¹¹。1941年12月号の休刊は「原稿が集まらなかった」¹²という理由が「編集後記」に書かれているが、この原因について川村研二は、植民地の政策に親日として加担する人物が出にくかったことと、『朝光』という朝鮮語文芸誌などの他雑誌が、日本語での記事も多少載せながらも、雑誌存続を図っていたという二つの事柄が関係していると述べている¹³。

また欠頁について、『国民文学』改題』では、発行間際の時点で発見され、時間的に差し替えのきかない問題点隠蔽のためのものと分析している¹⁴。明らかに検閲した形跡は全号で数か所（1942年4月号「新刊紹介」内p.77、小説「連

⁷ 趙景達『植民地朝鮮と日本』（岩波新書）、岩波書店、2013、p.188

⁸ 『国民文学』の姉妹誌 国民詩人（『国民文学』第四巻・第九号）、1944.9、目次頁裏

⁹ 『編集後記』（『国民文学』第五巻・第一号）、1945.1、p.96

株式会社人文社「本社刊行図書御注文について」（『国民文学』第四巻・第十二号）、1944.12、p.22

¹¹ 人文社編、前掲書、2001、pp.572-573

¹² 『編集後記』（『国民文学』第二巻・第一号）、1942.1、p.266

¹³ 川村研二「朝鮮と『国民文学』」（『昭和文学研究』第25集、1992.9、p.27

¹⁴ 人文社編、前掲書、2001、p.573

絡船」内p.87、p.88、小説「妻の故郷」内p.178、1942年12月号「朝鮮通信使史話（二）」内p.57、p.59、「朝鮮を去る日に」内p.96）しか発見することができないので、植民地国内では言論統制が緩かったという神谷忠孝の説¹⁵も考えられる。しかし、編集者は「或る一つの作品を乗せるべきか否かの根本問題に関して」「国家目的を体して自らの責任を以て決定を行ふ」¹⁶べきであると1942年10月号の巻頭言にあり、検閲の視点で雑誌掲載をするか否かを決定する姿勢がみられる。さらに、座談会「日米開戦と東洋の将来」という記録の冒頭で以下の会話が交わされていることは、注目すべき点である。

崔 ではこの辺で座談会に入りたいと思ひます。

古川 今までにも大分いゝ話があつたぢやないか。

黒木 さういふ作戦で、言つていかんことは今までに言つてゐつたんですよ（笑）¹⁷

ここから、発言してはいけないこと、つまり検閲される可能性のある話は記録しないという「作戦」を使い、都合のいい箇所のみ抜粋して掲載することも可能であったと考えられる。もしくは座談会の時点で既に発言に注意をし、何を話してもよい時間と、記録をする公的な発言の時間に分け、検閲で問題となるような部分を記録しないということも考えられ、墨塗りにする前に外からは見えないところで問題箇所を削除していた可能性が十分にある。

主幹崔載瑞（創氏名は石田耕造、石田耕人）は、京城帝国大学英文科及び同大学院出身であり、卒業後はイギリスのロンドン大学に留学するなど、当時のエリートコースを進んだ知識人である¹⁸。解放後は文壇から身を引き、英文学研究を行ないつつ延世大学校や漢陽大学校で教育に専念した¹⁹。原稿依頼に東奔西走し、時局の要請と現実の間に挟まれ、雑誌を刊行すればするほど悩みを増やしていった人物と思われる。

本論では全体を通して、文学を扱う人々の意見の相違やそれに伴う問題を取り上げ、いかにして解決法を探っていったのかを考察する。そして、悩んだ末、

¹⁵ 神谷、前掲論文、2009、p.55

¹⁶ 「編集者の地位と責任」（『国民文学』第二巻・第八号）、1942.10、p.2

¹⁷ 座談会「日米開戦と東洋の将来」（『国民文学』第二巻・第一号）、1942.1、p.6

¹⁸ 岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』岩波書店、2013、p.1608

¹⁹ 権寧珉編著（田尻浩幸訳）『韓国近現代文学事典』明石書店、2012、p.178

結局明白な結論が出ないという状態について、今は新しい時代へと向かう「過渡期」だから仕方がないという言い訳を多用して納得していったという文壇人の風潮から、「理想」的文学への道を進もうとする彼らの徒労を示していきたい。

まず本論では、文学の政治性と芸術性という性質を取り上げ、これらがどのように議論されどう利用されていったのかについて見ていく。次は、『国民文学』で設定された文学の指導理念について、その変遷を歴史とともに追っていく。さらに朝鮮文学をどう扱っていくのかといった議論をまとめる。もちろん、『国民文学』では、文学という概念それ自体だけでなく、当時の雑誌の編集者、作家、読者の状況、また豊富に掲載されている小説を分析することも重要な作業なのだが、それらは別途で考察する。

2. 『国民文学』における文学の捉え方

時代とともに雑誌上の文学に対する考え方が変遷していく。この変遷の中では、時局や国策が要求する「理想」の文学を、対立を繰り返しながらも必死に実現しようとする論者たちの姿勢が見られる。

ひとつ注意しておきたいのは、国民文学と文学を分けて考えるかどうかである。彼らは時として、これら二つの概念を同じものとして扱っている節がある。厳密には、文学という広義の概念と、その文学の一形態である国民文学とに分割して様々な問題提起をするべきである。しかし、例えば芸術性を論じる際には広義でも狭義でも共通の問題が存在していたので、ここでは大きな枠として、この時代ならではの文学としてどういう問題があったのかを探るために、文学と国民文学は同一概念として扱うことにする。また、国民文学とは何かという定義づけについては次章にて論じることとする。

さらに使い分けとして、二重鉤括弧の『国民文学』は雑誌の国民文学のことを指し、括弧のない単なる国民文学は、これから作っていく日本と朝鮮の国民の文学という意味で使っていく。

雑誌の中で特徴的な文学の捉え方としては、主に二つ挙げられる。一つは、文学の政治性を取り上げ、文学を国策に利用していかうとする捉え方で、もう一つは、文学は芸術であるという前提のもとに、文学の芸術性を強調していく捉え方である。

まず文学の政治性に関する問題を論じる。『国民文学』の論者たちは、文学は政治的に利用価値のあるものとして高く評価している。なぜなら、文学には様々

な効果があるからである。具体的に効果とは、宣伝効果、啓蒙効果のことであり、文学は対外的に国策を発信していくメディアとして扱われている。例えば、1941年11月創刊号に掲載されている「朝鮮文壇と私の歩んだ道」では、「多分の宣伝力を持った」文学の役割が重大であるとある²⁰。また、同じく創刊号の座談会記録から、すでに宣伝効果を利用しようとする指導者たちの姿がみられる。出席者の一人である白鉄は、「新しい国民文学の目標」は「全体的な立場で国策に副ふた文学を打樹てること」と述べ、「国策を民衆に宣伝してそれを啓蒙してゆくと云ふことが、新しい国民文学の課題であり、又新しい価値でもある」と続けている²¹。さらには、雑誌主幹である崔載瑞は「文学は意識的にでも無意識的にでも国家の宣伝手段にな」²²り、「文学が国策の宣伝になることは作家の義務でもあり、名誉であ」²³るとまで述べている。文学は国策及びその周知と不可分の存在となっているのである。

文学の宣伝効果・啓蒙効果は、「教育」²⁴という言葉や、「先導性」²⁵、「指導性」²⁶、また、文学の「説得力」²⁷と言いかえられ説明されている。

具体的に宣伝する事柄として挙げられているのは、朝鮮総督の掲げる政策スローガン「内鮮一体」「道義朝鮮」や、「皇道精神」「国体本義」という思想である²⁸。また、朝鮮への日本語普及も不可欠な宣伝項目である²⁹。さらに、朝鮮文人協会の改組により作成された「朝鮮文人協会実践要講」の中では、「東亜新秩序建設の認識徹底」と「徴兵制の趣旨徹底」も「作品の国策協力」として、宣伝項目にしている³⁰。このように指導者たちは、文学の政治的性質にいち早く目をつけて、操作しようとしているのである。

次は文学と芸術性の問題である。文学とは、芸術か。この前提となる疑問に対して多くの論者は賛成している。文学は芸術だという認識が当然のように語られているのである。例えば、文学は「芸術の中でも花形である」³¹と述べる論

²⁰ 金東仁「朝鮮文壇と私の歩んだ道」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941.11、p.55

²¹ 座談会「朝鮮文学の再出発を語る」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941.11、pp.71-72

²² 崔載瑞「国民文学の要件」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941.11、p.39

²³ 崔載瑞「私の頁」(『国民文学』第二巻・第三号)、1942.3、p.11

²⁴ 崔載瑞「国民文学の要件」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941.11、p.40

²⁵ 座談会「文芸動員を語る」(『国民文学』第二巻・第一号)、1942.1、p.114

²⁶ 平沼文甫「生活と文学」(『国民文学』第二巻・第五号)、1942.5・6、p.11

²⁷ 金鍾漢「編集後記」(『国民文学』第三巻・第二号)、1943.2、p.168

²⁸ 対談「文化と宣伝」(『国民文学』第三巻・第一号)、1943.1、p.79

²⁹ 石田耕人「文芸時評」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12、p.54

³⁰ 寺島驍「朝鮮文人協会の改組に就きて」(『国民文学』第二巻・第八号)、1942.11、p.43

³¹ 徳田馨「文芸随想 満州文学のことなど」(『国民文学』第三巻・第四号)、1943.4、p.34

者もいれば、金村八峰³²や鄭人澤³³のように、文章中に「文学（芸術）」と括弧書きで示す論者もいる。また、作家は芸術品を生み出す工匠に譬えられている³⁴。その他様々な論文や記事で、文学は芸術であるという前提で主張が展開されていく。

これほどまでに文学の芸術性が述べられるのはなぜか。それは、芸術は人を楽しませるものという観点が前提にあるからである。文学を芸術と捉える論者は、文学は慰安であり、楽しいもの、面白いものとして繰り返し主張する。このように強調する理由は、文学の楽しさ、面白さで国民を慰安する効果に注目しているからである。当初は、純粹に読者（国民、一般民衆）への同情心からこの効果に着目しており、後述する、面白さを政治利用しようという意図はまだ見られない。例えば、崔載瑞は「私の頁」で次のように述べている。

国民は今戦争に一生懸命である。… [中略] …そして色々な娯楽機関や遊興場所が縮小廃止されてもそれを当然のこととして、寧ろ娯楽等は忘れたかの如くである。それだけに、文筆業者の一人として、兼ねては編集者の一人として国民に楽しい読物を与へたいと云ふ祈念は切なるものがあるのである。³⁵

そして、「国民文学と云ふのは職業や階級の差別なく国民全般に楽しく読まれるやうな文学であるべき」であると続け、そのためには芸術は「悲劇」でなければならないとしている。なぜならその方が、国民にカタルシスを与えられるからである³⁶。

しかしここで述べられている芸術的面白みを持つ文学とは、文学を大衆文学と純文学に分けて考えるならば、純文学に限られていることに注意が必要である。雑誌上には一貫して、文学を純文学と大衆文学に分けて考える文壇の姿勢がある。例としては、読書状況を把握するための調査の結果報告において、純文学と大衆文学とを分けて売上げ状況を把握していることが挙げられる³⁷。

³² 金村八峰「生産と文学」（『国民文学』第四巻・第七号）、1944. 7、p.65

³³ 鄭人澤「新しい国民文芸の道—作家の心構へ・その他—」（『国民文学』第二巻・第四号）、1942. 4、p.53

³⁴ 岩谷鍾元「決戦文学の理念」（『国民文学』第四巻・第四号）、1944. 4、p.36

³⁵ 崔載瑞「文芸時評—私の頁—」（『国民文学』第二巻・第四号）、1942. 4、p.37

³⁶ 同上、p.38

³⁷ 「文化陣營」（『国民文学』第三巻・第二号）、1943. 2、p.102

そしてこのように分類する根底には、芸術性の低い（娯楽性のある）大衆文学は低俗だが、純文学は高級で芸術性が高いというように、芸術と大衆娯楽は別物であるという意識がある³⁸。よって、大衆文学には娯楽的な「面白さ」はあるが、芸術的な「面白さ」を持ち合わせていないことになる。その見解は、「大衆文学は、結局低級な常識によつて武装された文学である」³⁹と程度の低さを述べたり、文学が「娯楽性、大衆性に気を取られることに依つて、墜落を招くのは火を見るより明らか」であるので、国家理念を芸術的に具象化した文学を目指すべきであると主張したり⁴⁰、「大衆文学は云ふまでもなく、純文学までも——一種娯楽的欲求を充足せんが為に読んで来たものではなからうか」⁴¹とこれまでを批判するなど、様々な論説から読みとれる。

なかには、「今更大衆小説だの、芸術小説だのと、楊子で重箱の隅をほじくるやうな議論はしたくない」ので、もし作家に「大衆文学的才能があるならば大いにその方面に驥足を伸ばして貰ひたい」⁴²と大衆的要素も明確に認めている言説もあるが、少数意見である。

このように文学の芸術性という面では、芸術性の高低という程度の問題があるものの、全体として文学は芸術であるという認識となっている。

以上、文学の政治的面と芸術的面の認識をみてきたが、これらの捉え方に問題点が一つある。それは、文学の政治性と芸術性をどう出現させてこれからの時代に利用していこうとするか、つまり文学を扱う方向性に賛否両論あるということである。意見を分類すると、主に三つある。一つ目は、たとえ面白さが欠けたとしても政治的面を重視し、国策に都合のよい手段と化する意見。二つ目は、芸術面に着目して、文学を国民の慰安のために利用しようとする意見。三つ目は、極端な方向を避け、政治性、芸術性の両方をバランスよく取り入れたいという意見。これら三つの意見が、雑誌全体に混在しているのである。以下では、それぞれの意見がどのようになされているか見ていく。

まず一つ目の主張は、文学の政治性を強調する政治派である。例として、次の論が挙げられる。

宣伝啓発の手段として文化人の動員計画について尋ねられた際に、総督府の

³⁸ 崔、前掲書、1942.4、p.37

³⁹ 安含光「朝鮮文学の特質と方向について」（『国民文学』第三巻・第一号）、1943.1、p.43

⁴⁰ 吳洋「演劇時評」（『国民文学』第三巻・第三号）、1943.3、pp.47-48

⁴¹ 岩谷、前掲書、1944.4、p.35

⁴² 石田耕人「決戦下文壇の一年一特に創作にみる一」（『国民文学』第三巻・第十二号）、1943.12、p.16

倉島情報課長は、「文学者には、どの文化畑よりも大きい翼賛を待望してゐる」⁴³と期待を寄せている。「文学の効用」と題がついた座談会では、井上康文が「国民の戦意を高揚させる」ための文学について語っているが、「厳格な意味で芸術的形態を論議してゐるときではない」と、芸術性を放棄した文学を推進している⁴⁴。また「現代への決意」では、「文学が芸術的法規の制約にのみ従はねばならない必要はないのである」とあり、政治が「現実」と言いかえられ、「ひとりの作家が、芸術か現実か（或は文学か政治か）の心理的ジレンマに逢着した時」に「芸術的昂揚を棄て、現実へと力強く没落する」態度は「英雄的行為」であるから、作家は早急に「現実」へ没落、つまり政治を意識した文学活動をしなければならぬとしている⁴⁵。

そして、時代がますます戦争一色になっていく1944年頃からは必然的に政治色が強くなり、当然のように政治的宣伝効果を最初から狙うようになる。その根底には、「まつろふ文学」から政の文学が発展すべきという意見の登場がある⁴⁶。そこでは、「まつろふ文学」という文学理念を創りだし、その言葉の創生に政が絡んでいると説明することで文学の政治関与を明らかにしている。この文学理念は1944年4月号に雑誌主幹の崔載瑞が提唱したものであるが、これに呼応するかのように、同じ号では文学の政治利用を推奨する論が以下の言説となって現れる。

戦ふ文学が迫るべき当然の順序は、従来の解釈に於ける芸術性の放棄であり、…〔中略〕…決戦国民生活の啓蒙にある。何も文学がいふところの芸術性に拘泥して古態を固持し、戦争完遂への重要部署を回避すべき何ものもない。文学者は文学が政治の従属物化されたと難ずる勿れ、今更文学と政治を二元的に対立させて置く必要が何処にあると云ふのか。文学に限らず、総ての文化部署が合目的的に一すぢに向つて進撃してゐるのである。かくて如上の意に副ふ文学機能の發揮は国家意志を国民に浸透さす上に於て、多分に宣伝性を帯びる。宣伝文学が芸術的に文学の退歩を意味すると断定するならば、極端に云つて文学が芸術性の擁護の爲めに、国家の存亡

⁴³ 金記者「時の横顔1 小供とねころんで文化動員を考へる ある日の倉島情報課長さん」（『国民文学』第二巻・第六号）、1942.7、p.81

⁴⁴ 座談会「戦争と文学」（『国民文学』第三巻・第六号）、1943.6、p.143

⁴⁵ 朴赫「現代への決意 作家の文学的態度について」（『国民文学』第三巻・第九号）、1943.9、p.22

⁴⁶ 石田耕造（崔載瑞）「まつろふ文学」（『国民文学』第四巻・第四号）、1944.4、pp.16-18

を顧みぬことになる。文学制作が国家への貢献の道として、ことさらに高き芸術性を云為することは危険である。⁴⁷

このように明白に文学の芸術性を否定し、文学を政治に利用することを正当化していく傾向が見られるようになるのである。

次に、文学の芸術性を重視する芸術派の意見を取り上げる。例として、以下の言説がこちらの意見に属する。

主幹崔載瑞は、政策の「力説や宣伝は政治家や教育者にも出来ることで、文人にはもつと別な職域」があると述べ、政治と文学を切り離す。そして、「統後の国民にうまみのある文章を提供すると云ふことは戦時下作家の神聖な職域でなければならぬ」として、民衆を引きつけるうまみ、つまり面白さという芸術性を求めている⁴⁸。また、呉禎民は、「戦時下であればあるほど」、「荒んだ人心を一時に清め」るための「美意識の透徹」が「今の時代の文学の一つの役割」と述べ、芸術的感性の必要性を訴えている⁴⁹。さらに詩人・城山豹は、「新聞の見出し」のような詩を書く詩人を批判し、外から与えられたテーマで書く態度は「真底から嫌ひである」と述べている⁵⁰。国策的な政治スローガンを詩として発表することを批判するということは、芸術性を必要としているということである。

最後は、文学の政治性も芸術性も、極端に表出することのないようにと唱えるバランス派である。政治的であり、かつ面白さという芸術性もある「理想」の文学が実現困難なために起こった一種妥協的な、苦し紛れのどっちつかずの主張をしていく。これは、以下の形で表れている考え方である。

崔載瑞は「統制の効果」と題された文章にて、政治的な「統制がこんなに厳しくは文学は、一寸文学はやり難い、と云ふのが既成文人の本音ではなからうか？」⁵¹と敢えて否定的なことを述べた上で、次のように文人たちの不安を払拭しようとする。

統制の効果は一部の人々が心配するやうに文芸の荒廃では勿論ない。かと

⁴⁷ 岩谷、前掲書、1944.4.、p.38

⁴⁸ 石田耕造「文芸時評」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12.、p.54

⁴⁹ 「文学鼎談」(『国民文学』第三巻・第九号)、1943.9.、p.36

⁵⁰ 城山豹「私の主題—詩作覚書—」(『国民文学』第四巻・第九号)、1944.9.、p.40

⁵¹ 崔、前掲書、1942.4.、p.35

云つて一部の人々が無造作に考へるやうに、それだけで文芸の質が向上すると云ふものでもない。⁵²

つまり、文学を政治利用することは文学の発言力を考慮するならば当然あつてしかるべきことであるが、だからと言って政治性のみ取り上げて芸術的な価値を無視してよいということにはならない、と主張するのである。

また、国民文学としての論の中では「国民文学が単なる国粹文学であつてはならない」が、「といつて国民文学が国民大衆を楽しませる卑俗な文学であつてはならない」といった記述もあり、極端さを避ける文人の考えが表れている⁵³。そして、文学者と政治に関する論の中では、

…〔前略〕…文学者が政治に無関心でいゝといふのではない。むしろその反対に、文学者はもつとも深い注意を現在の瞬間の奥底にむかつてそゝがねばならないものだと考へる。ただ政治的活動と文学的活動とは本来その性質を異にするものであること、また文学創造の能力と政治的活動の能力とは必ずしも一致するものではないことを考へる。

もしも自己の内に政治的才能の欠けていることが省察されるものならば、それをしも強いて政治の舞台に踏みこむことは自らを欺くことゝなるであらう。⁵⁴

とあり、文学は政治に注目すべきではあるが、文学と政治を区別するか否かは個人の問題であるかのように述べている。さらに類似した意見として、以下の文章が挙げられる。

一つたい、文学に対しては二つの方向からの偏見があつて、一は文学を政治化しやうとし、他は政治を文学より追放しやうとする。しかしその二つとも偏見であることに変わりはない。なぜなら既に自明であるやうに、文学は文学であつて政治ではないのだし、かといつて政治もまた生活である以上、これを文学より排斥する術はないからである。⁵⁵

⁵² 同上、p.36

⁵³ 鄭飛石「新しい国民文芸の道—作家の立場から—」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942.4、p.56

⁵⁴ 徳田馨「歴史小説について」(『国民文学』第二巻・第五号)、1942.5・6、p.21

⁵⁵ 兪鎮午「国民文学といふもの」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942.11、p.5

こちらは、極端な意見を偏見と捉える考え方である。文学の政治性、芸術性を認めることで、政治派、芸術派の意見両方を批判している。

「朝鮮文学の特質と方向について」では、より詳細に論を展開している。まず「政治と国民文学の関係」については、二つの考え方があるとして紹介している。一つ目は、「国民文学は時局の号令を遵奉して徹底的に政治文学になるべきだと云ふ主張」であり、二つ目は、「政治文学なるものを割合平静なる眼で考察しつゝ、出来るだけ正常なる位置に定位付け様とする、いはゞ節度を重んずる態度」である。そして、前者の意見を「一応」評価するが、「国民生活に於ける政治の至上位は国民文学に於ける政治の独裁を意味するものであつてはならない」ので、「国民文学が狭義の政治文学に惰するやうなことは、大いに警戒する必要がある」としている。しかし、だからといって政治文学全面を否定するのではなく、「現時の国民文学は広義の政治文学である必要はある」と述べている。これを端的に、「文学は、単に政治の手段たるべきではない。それとは違つて、文学は政治の媒介者たるべきである」と表現している⁵⁶。そして、極端な傾向を否定するのである。同様の意見に、次の論がある。

抑々文学がその効用性を主眼とし、効果を先に掲げて創作される時、ともすればその作品は市場の物品売買的功利主義に陥り、文学の眞本領である芸術性を忘却して一章の国民道徳的説教に墮し易い。文学の啓蒙的役割を我々が認むるならばその結果としての効用性を否定するわけにはいかぬが、作家が意識的にその意図を表に掲げ、効用をあらはに強調するとき却て読者に及ぼす影響力は逆効果を齎らし、当初の使命を期し難いのも事実である。…〔中略〕…これは勿論文学がその芸術性の擁護の為に効用性を度外視して取扱はるべきだといふ意味ではなく、芸術本来の結実である自然的発露としての効用が読者に影響づけるべきであるといふことである。⁵⁷

上述の引用文では政治も芸術もどちらも否定できず、芸術である文学のなかに政治性の「自然的発露」を望む、という漠然とした希望を述べている。

雑誌終刊直前の1945年3月号になっても、この論議はまだ続く。「朝鮮の文学について」では、「文学は政治に隷属するものではない事勿論だが、政治と相並

⁵⁶ 安含光、前掲書、1943. 1、pp.45-48

⁵⁷ 「時言 生産文学と効用性」(『国民文学』第四巻・第七号)、1944. 7、pp.1-2

んで国民精神運動の一翼たるべきものには相違ない」と書かれている⁵⁸。

以上のようにこのバランス派は、どちらにも極端に主張ができず、混乱している様子である。また、自然にじみ出るように政治性と芸術性をどう表現するのか、具体的にどうバランスをとっていくかという方法はわからないままである⁵⁹。

年代から見ても、政治派、芸術派はいつも混在しており、どちらかに方向性を定めるといった結論が出ていない。しかし、芸術派は徐々に主張を変化させている。表面的には戦時下の国民を慰安したいという従来の主張は繰り返されていくが、その理由は当初考えられていたようなただ純粋な同情心から変化し、より政治的思惑を含むようになる。つまり、戦時体制下の国民がかわいそうだから文学を利用して慰安したいという主張から、戦争に向けて気合いを入れさせ、国家のために働かせるために国民を慰安しようという文学の啓蒙効果を意識した主張へと変化していくのである。1944年6月号巻頭言は、文人に次のように語りかけている。

文人は筆を取る前に、もう一度反省するがよい。自分が何のために文章を書いてゐるのかと。自分の書くことが少しでも国民の士気を鼓舞し、些かなりとも戦力増強に寄与すると云ふ自信がなければ、その人は直ちに筆を捨つべきである。⁶⁰

当時は「生産文学」なる理念が提唱され、文学作品を提供することで読者に少しでも生産させる意欲を高めようとしていた時代である。小説の中においても、「よく働く者を、働くからといって十二分に働きつゞけさせてはならない、働く者こそ、しつかり休息させ、常に力を蓄へさせるべきだ」と持論を述べる劇作家がいる⁶¹。そのための手段としての、劇、文学、芸術なのである。

しかし、このように文学が政治利用に傾くといっても、面白みがないと人々への宣伝効果が薄れるという懸念が表明される。つまり、戦争意欲は高めたいが、単なる国策スローガンの連呼では面白さがなくかえって意気が失せるという逆効果が生まれる。また、朝鮮に限っていえば、政策を露骨に表すことで朝

⁵⁸ 加藤武雄「朝鮮の文学について」(『国民文学』第五巻・第三号)、1945.3、p.13

⁵⁹ 座談会「明日への朝鮮映画」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12、p.72

⁶⁰ 「時言」(『国民文学』第四巻・第六号)、1944.6、pp.1-2

⁶¹ 楠田敏郎「新しき世代(第五回)」(『国民文学』第四巻・第十一号)、1944.11、p.106

鮮の民衆に「反発失笑を買ひ或は敬遠」⁶²されてしまうという懸念もある。芸術性の軽視は、政治性の効用を失うことに繋がるのである。よって、バランス派のいう政治性と芸術性の両方を上手く使いこなす、「理想」的な方法を具体的に考えることとなる。

この問題は映画・美術部門でも議論される。映画界では満州の例を参考に⁶³、具体的な方法論として「見させる」映画と「見たがる」映画の二分法が提案される⁶⁴。政治性と芸術性を完全に切り離し、それぞれで作品を創る考え方である。政治的な映画はたとえ民衆が見たがらなくとも動員という強制をすればいいことなので、見せたいものも見せることができる。その一方で、芸術的な映画によって心を慰めることで士気も高められるという効果を狙っている。だが、結局はこの方法についても批判が出る。1944年8月号「劇映画について」では、「国民必見」(政治映画)と「娯楽」(芸術映画)を分ける考え方に否定的評価を下している⁶⁵。そしてこれ以降、二分法が雑誌上で取り扱われることはなくなり、議論は自然消滅する。

このようにいつまでも結論の出ない堂々巡りをしているが、この答えの出ない中途半端な状態の理由を皆に納得させる一つの言葉が、「過渡期」である。政治性に傾いていて面白くないという批判に対していつも使われる言い訳が、「まだ過渡期であるから」なのである。つまり、「理想」は持っているものそこにとどり着けないのは、まだ体制が整っていないから、という論理に持つていくのである。

例えば、雑誌創刊一周年ということで開かれた座談会「国民文学の一年を語る」にその論理が表れている。白鉄が、「時局的な題材に捉はれ過ぎてゐる」で「作品全体としては、却つて水準が墜ちてゐる」⁶⁶と、芸術的に「粗雑」⁶⁷な作品に憂いを述べている。ところがその意見に対して牧洋(李石薫)は、「一応は時局的作品にぶつかつて見」⁶⁸なければいけないとし、たとえそれで作品が堅苦しくなったとしてもいいと反対している⁶⁹。この意見に、「政治的な小説もあつて

⁶² 星出壽雄「演劇統制の諸問題」(『国民文学』第二巻・第一号)、1942.1、p.46

⁶³ 座談会「決戦美術の動向」(『国民文学』第四巻・第五号)、1944.5、p.60

⁶⁴ 座談会「軍と映画—朝鮮軍報道部作品『兵隊さん』を中心に—」(『国民文学』第四巻・第六号)、1944.6、p.56

⁶⁵ 呉泳鎮「劇映画について」(『国民文学』第四巻・第八号)、1944.8、p.34

⁶⁶ 座談会「国民文学の一年を語る」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942.11、p.86

⁶⁷ 同上、p.87

⁶⁸ 同上、p.86

⁶⁹ 同上、p.87

いゝ」⁷⁰と兪鎮午も同調する。そしてその理由として、「やつぱり過渡期の現状としては粗雑であつてもいゝ、さうしてそこを通り越した時に、本当に自分の身についたものが出て来る」⁷¹と牧洋は語っている。

したがって、文学に欠陥が残る状態でも許されるのは、まだ新しい文学の建設期であり、「過渡期」であるからという言い訳が通用するためである。

3. 国民文学の指導理念

文学にも、「理想」の形が存在する。雑誌上では、目指すべき文学を表すものとして様々なスローガンが登場する。それらは時代の変遷とともに変わっていくが、迷走を続け、作家たちを混乱させている。目標を整えては批判し合い、挫折する。最終的に新しい目標が完全に達成されることはなく、いつまでも「過渡期」という評価で終わる。

この目標となるべき文学理念は、おおよそ5つからなる。雑誌で大々的に取り上げられた年代で区分すると、第一が「国民文学」(1941.11)、第二が「決戦文学」(1943.5)、第三が「大東亜文学」(1943.10)、第四が「まつろふ文学」(1944.4)、そして第五が「生産文学」(1944.7)である。他にも「～文学」なる用語が出ているが、上記5つの理念用語が主に雑誌で大きく取り上げられ、括弧内で示した号以降から、この指導理念に沿った方針での内容が頻繁に現れるようになる。この理念ができるきっかけは、政策や日本での流行文学の影響など、朝鮮文壇の外から生まれるものであり、歴史的背景を無視して語ることはできない。したがってここでは、各文学理念の段階で当時の朝鮮や日本がどのような社会情勢にあったのかを示しながら、理念の内容を確認していく。

まず、雑誌上において問題となるのが、「国民文学」の定義である。前章では、国民文学と文学を同一概念として扱ったが、ここでは国民文学という言葉そのものの内容を探っていくので、広義での文学とは考えずに論じていく。

植民地時代の末期では「国民文学」というスローガンは、雑誌の名にもなっているほど重要なテーマとして受け入れられていた。なぜならこの語は、1939年に南次郎朝鮮総督が喧伝し始めた「内鮮一体」の標語から着想されたからである。当然これは『国民文学』創刊前から雑誌等で取り上げられていた理念であった。実際1941年5月号の『新潮』に掲載された「新潮評論」の「国民文学

⁷⁰ 同上、p.87

⁷¹ 同上、p.88

について」では、筆者が「国民文学論が、今、非常に盛んである」⁷²と爆発的な流行に驚きを示すが、「国民文学」があまりに抽象的で実体を掴むことができず、暗中模索する様子が表れている⁷³。

初期の『国民文学』では、この「国民文学」という図体は大きいが中身は何も決まっていない用語に対して、どう定義づけを行なうかという問題から論じることになる。そこから、「国民文学」自体の未来の理想像（計画）を捉えていくのである。

まず、創刊号では早速主幹崔載瑞が「国民文学の要件」という論考で、「国民文学」について定義づけを試みている。崔は、「国民文学は、これから国民全体がかつて築き上げなくてはならない大いなる文学」⁷⁴とし、「今日高度国防国家体制の必要に応じて引き起こされた革新の文学上の目標」⁷⁵であると述べている。では、「国民文学」は具体的にどのような文学なのか。この問題に関しては、これまでも「国民文学」については「各人各説で、殆ど帰する所を知らない有様である」⁷⁶と文壇人の混乱を説明している。よって、「既に明確な使命を帯びてゐる文学」ではあるが、「未だ明瞭な型態と性格とを備へていないとしている」⁷⁷。少し進んで1942年3月号の「私の頁」で崔はまた、「国民文学」とは「日本国を代表するやうな文学」⁷⁸であると端的に述べているが、具体性に欠けている。また、1942年7月号の時点でも崔は、「国民文学」には定まった見解が何一つとしてないため、「結局自分で切開いて行くより他ない」⁷⁹と述べている。これらから、「国民文学」の定義がまだ固まっていない様子がわかる。

上記創刊号にてさらに崔は「国民文学」の主題の問題にも入るが、「国民の要求と理解を代表する」立場、「国民的立場」⁸⁰を取り上げればよいという、やはり漠然とした意見を述べる。この崔載瑞のような漠とした言説があふれていては、作家をますます混乱させるだけであった。「国民文学」に関する論を一通り読んだという鄭飛石は、「国民文学とは如何なる文学」なのか、「恐らく論者自身さへ

⁷² 「新潮評論」新潮社『新潮』、1941.5、p.5

⁷³ 同上、p.6-7

⁷⁴ 崔載瑞「国民文学の要件」（『国民文学』第一巻・第一号）、1941.11、p.34

⁷⁵ 同上、p.35

⁷⁶ 同上、p.34

⁷⁷ 同上、p.35

⁷⁸ 崔載瑞「私の頁」（『国民文学』第二巻・第三号）、1942.3、p.10

⁷⁹ 座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」（『国民文学』第二巻・第六号）、1942.7、p.51

⁸⁰ 崔、前掲書、1941.11、p.37

もはつきり解らずに物を言つてゐるやうに感じられたこともなくはなかつた」⁸¹と不満を述べている。

案の定題材問題は尾を引く。初期では、「国民文学」だからといって、必ずしも時局を書かなければならないというように狭く解釈しなくともよい⁸²という意見に賛同する論者が増える。しかし、上記「国民文学の要件」で崔は、真の「国民文学」とは、国民を教育し、国民を形作っていくという性格がある、つまり、文学は国民の性格を創る効果があることを強調している⁸³。先に述べたように、「文学」の前にわざわざ「国民」をつけて唱えられた「国民文学」は、朝鮮人と日本人が一つの国民になるという「内鮮一体」の時局的スローガンを元から内包しているものであり、この考えは題材を考える際の一つの条件として作家にのしかかっていく。

さらに、国民の理想を謳った作品、つまり「国民文学」がどのような読者を対象としているかということを示す言葉が、1942年4月号に掲載されている。

我々は我々の理想を謳った作品が当に大東亜共栄圏内に於いて読まれるばかりでなく、欧羅巴に於いても、否更に敵国米英人に依つてさへ広く読まれ愛され尊敬されることを期し度いものである。⁸⁴

以上のように、「国民文学」という指導理念に沿った作品の読者を「大東亜共栄圏」に限定していないところに特徴がある。「国民文学」を全世界の「理想」文学として想定しており、グローバルな視点でも捉えられている。

初期の傾向としては、上述のとおり「国民文学」自体の説明は試みているものの、その「国民文学」を生み出していく作家がどのような心構えでいるべきかという点に、より論が集中している。よって創刊号の「編集後記」では、座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」での「国民文学」の定義論について、「結論の明白でないことを咎む勿れ」⁸⁵と弁明している。

「国民文学」には、『国民文学』が全面日本語雑誌に方向転換したことがきっかけとなって、日本語(国語)で書く文学、という概念が新たに加わる。その

⁸¹ 鄭飛石「特輯 新しい国民文芸の道—作家の立場から—」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942. 4、p.56

⁸² 同上、pp.59-60

⁸³ 崔、前掲書、1941. 11、p.40

⁸⁴ 崔載瑞「文芸時評—私の頁—」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942. 4、p.35

⁸⁵ 「編集後記」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941. 11、p.235後

宣言として、今までの朝鮮文学は、「これで名実共に国民文学になり得ると確信するのであります」⁸⁶という文が挙げられる。

しかし、この「国民文学」という理念はここで具体的に確立されたわけではない。現に1942年4月号の「編集後記」には、「過渡期による必然的な混乱」のせいで「多くの理論的な欠陥や思索の未熟を指摘し得る」と記載されている⁸⁷。「過渡期」であるからまだ確立もされておらず、欠点があると弁解しているように聞こえる。また、理念が確立されていないことから、当然「国民文学」という理念に合った「理想」的な作品も特定できない。1942年5月号の『朝光』では、『国民文学』でも座談会や小説、エッセイなどで多く登場した田中英光が「国民文学といふ呼声ばかり盛んで、その実、毎月の文芸雑誌類を見渡しても、格別、国民文学といふレッテルにふさわしい作品の見つからない」⁸⁸と述べているが、この状態は「国民文学」が「過渡期」である限り続くのである。

4. 戦争へ向かう文学

前章の「国民文学」というスローガンは、「内鮮一体」を具現化させるための、主に植民地支配に目が向けられた理念であったが、文学の指導理念は時局の変遷によって、戦争推進を目標に掲げるようになる。『国民文学』創刊前後の「国民文学」論からももう少し時が進むと、文壇においては「決戦文学」に向けての準備が始まっていくのである。具体的には、まず「構えの文学」から「決意の文学」、そして「決戦文学」と進むことになる。

まずは、朝鮮から兵隊をとる動きが活発化していったという情勢が文学にも影響を与える。この動きは元々兵力不足を補うためであり、1938年の陸軍特別志願兵制度から始まった動員である。そしてついに1942年5月8日に、1944年からの徴兵制実施が閣議決定された。このことがきっかけとなって、少しずつ戦争色が文学の「理想」に加えられていく。その兆しは、1942年7月号座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」の崔載瑞の発言に見られる。徴兵制実施の発表があったことから設けられたこの座談会では、文学にも徴兵制という一大事件を反映させようと模索している文人たちの姿が窺える。そこで、徴兵に関して表面化してきた「兵役に対する恐怖乃至誤解」に対処するために、崔は、「軍

⁸⁶ 国民文学「国語雑誌への転換」(『国民文学』第二巻・第五号)、1942.5・6、p.44

⁸⁷ 主幹「編集後記」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942.4、p.192

⁸⁸ 田中英光「国民文学への感想」『朝光』、1942.5、p.86

人崇拜の念を養ふ」文学を創るのがいいと述べている⁸⁹。

戦争へ向かっていく文学が次に見出したのは、「構への文学」⁹⁰である。「構へ」とは、作家が「国民文学」を書こうという姿勢をはっきりと持ったということであると崔は述べている⁹¹。続けて崔は「構へ」を表す具体的な作品として、牧洋（李石薫）の「静かな嵐」や宮崎清太郎の「子と共に」を挙げている。この考えは主に、雑誌創刊から今までの一年の「国民文学」の振り返りをきっかけとして述べられている。

そして、「何時までも構へぢやいけない」⁹²という考えからか、牧は「決意の文学」という言葉を出している。我々は日本人に生まれ変わるという「決意の文学」を書くべきである、と述べているのである⁹³。この「決意の文学」とは、元々は牧洋と林房雄との対談の中で林が出した言葉である。牧は、政治性が強調された文学を目指すことが現段階での作家の仕事であるが、それを示すにはこのスローガンが適切であると主張する⁹⁴。また、アジア・太平洋戦争開始から一周年の1942年12月号には「私の決意」という作家の投書風コラム⁹⁵が掲載されており、「決意の文学」意識がうかがえる。

指導理念については、それが達成できているのかどうか、現状を見つめなおす論調がしばしば登場する。大抵は、新しい理念ができたなら前の理念の反省を行なう、という流れがある。ここではまず、「国民文学」批判が現れる。つまり、「決意の文学」を理念に掲げたからといって、ステージを段階的に登っているわけではなく、以前から掲げられていた理念である「国民文学」は完成していないという主張である。1943年1月号巻頭言では、「わが国民文学は未だ充分の発遠を見るに至らない」⁹⁶と、今現在も朝鮮文壇が「過渡期」であるという評価を下している。

戦争に勝つための文学、「決戦文学」がいよいよ唱えられ始めるのは、朝鮮文人報国会が発会した時からである。朝鮮文人報国会とは、1943年4月17日に朝鮮文人協会、朝鮮俳句作家協会、朝鮮川柳協会、国民詩歌連盟、国民歌人協会

⁸⁹ 座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」（『国民文学』第二巻・第六号）、1942.7、p.46

⁹⁰ 座談会「国民文学の一年を語る」（『国民文学』第二巻・第九号）、1942.11、p.90

⁹¹ 同上、p.91

⁹² 同上、p.91

⁹³ 牧洋「『静かな嵐』など」（『国民文学』第二巻・第九号）、1942.11、p.103

⁹⁴ 牧洋「林房雄氏と文学を語る」緑旗連盟『緑旗』、1942.7

⁹⁵ 「大東亜戦争一周年を迎える 私の決意」（『国民文学』第二巻・第十号）、1942.12、pp.13-18

⁹⁶ 「戦捷の春（巻頭言）」（『国民文学』第三巻・第一号）、1943.1、p.9

の発展的解消により結成され、戦時中には従軍作家講演会、日本作家歓迎談話会、海軍称揚詩朗読会、出陣学徒激励大会などを行っていた文学団体である⁹⁷。

元々『国民文学』は、1939年に結成され、「新しき国民の文学を提唱」し、「今迄別々であつた内鮮の文人をして一つに結合せしめた」役割を果たしたと緑旗連盟の津田剛が評価した⁹⁸文学団体である、朝鮮文人協会との繋がりが大きかった。李光珠や兪鎮午など『国民文学』に作品を載せている作家たちや『国民文学』の主幹崔載瑞は、協会を設立したメンバーとして名を連ねていた。これが朝鮮文人報国会というより大規模な組織に生まれ変わり、引き続き『国民文学』のメンバーが役員として関わっていくようになる。さらに、アジア・太平洋戦争開始の約半年後の1942年5月26日に結成された、日本文学報国会という日本(内地)の文学団体選定の「愛国百人一首」を1943年1月号に掲載し、近藤時司によるその評釈を1943年2月号から5回に分けて連載するなど、『国民文学』とこれら文学団体は密接に結びついていた。

1943年5月号の「文報の頁」では、朝鮮文人報国会の発会式を伝え、「この会の精神は云ふまでもなく戦ふ文学の態勢に整へるにある」⁹⁹と述べている。このように戦争をより意識して文学団体の体制強化に乗り出したのも、1942年12月に日本がガダルカナル島での戦いに負けて島からの撤退を決定し、これを転換点として日本よりアメリカの戦力が拡大していき、日本の戦局が悪くなっていく時代に突入したからであったと思われる¹⁰⁰。

また、1943年6月号「決戦文学の確立」には、「決戦文学の確立は如何にしてなされるか」という題に対して各報国会員が論を展開している¹⁰¹。彼らは一様に、アジア・太平洋戦争に「勝たねばならない」という意識を持ち、その意識を文学に反映させることを考えている。例えば、柳到眞は「現在のわれわれの文筆生活は戦争のために生まれ、そのためにのみ向けられなければならない」¹⁰²と決意を語る。さらに崔載瑞は、

⁹⁷ 韓国史事典編纂会・金容権編著『朝鮮韓国近現代史事典 第二版』日本評論社、2006、p.310

⁹⁸ 津田剛「転機の朝鮮文壇 国策と文芸—文人協会の役割について—」朝鮮総督府『朝鮮』、1940. 1、p.66

⁹⁹ 「文報の頁」(『国民文学』第三巻・第五号)、1943. 5、p.120

¹⁰⁰ 吉田裕『アジア・太平洋戦争 シリーズ日本近現代史⑥』(岩波新書)、岩波書店、2007、pp.89-91

¹⁰¹ 「決戦文学の確立」(『国民文学』第三巻・第六号)、1943. 6、pp.40-47

¹⁰² 同上、p.42

目的は勝つことにある。…〔中略〕…決戦文学とは、かうした目標に向つて進む時に文学者の出遭ふ一つの戦場である。そこには目に見えない思想戦が繰返されてゐる。¹⁰³

と、「思想戦」という言葉で「決戦文学」の性格を説明している。また松村絃一（朱耀翰）は、「勝たねばならぬ」という「信念から流れ出る文学」が「即ち決戦文学」だと定義づけている¹⁰⁴。こうして戦争への文学理念は生れ出たのである。

具体的に「決戦文学」を意識して書かれた作品や、この理念を代表する作品を特定することは難しい。なぜならこれは作家の意識の問題であつて、題材が定義されたわけでもなく、「国民文学」という曖昧な枠にも組み込まれるような理念だからである。

次に、「大東亜文学」という理念について見ていく。大東亜文学者大会が開催されてからは、『国民文学』内でも「大東亜文学」の呼び声が高まっていく。日本文学報国会による大東亜文学者大会は、1942年11月に第一回目、1943年8月に「大東亜文学者決戦会議」という名で第二回目、そして1944年11月には「南京大会」が第三回目として開催された。1945年には第四回「新京大会」も企画されていたが、日本の敗戦により開催されることはなかった。これは「大東亜共栄圏」内の国の文学者の代表が集まり、「大東亜文学」建設に関する抱負などを語り合うことが目的の会である。後述するが、『国民文学』で大々的に「大東亜文学」が扱われるのは第二回の文学者大会後である。

1942年2月号の座談会「大東亜共栄圏の構想」では、「大東亜文学圏」が語られる。ここでは、「共栄圏」内に入る文学として「日本文学、その中の朝鮮文学、満州文学、支那文学、安南」、そして「印度」が挙げられている¹⁰⁵。さらに、具体的に「大東亜文学」を意識した文学論が登場するのである。それが、1942年12月号の「来るべき古典主義の文学」である。この論は、「報道文学」、「国民詩」、「時事文学」も時局柄ありがたい文学であるが、その段階にとどまっているのではなく、（擬古主義ではない）ロマン主義とリアリズムを「日本の文芸創造精神」によって総合し、純化させた新古典主義文学を「大東亜文芸復興」として出現

¹⁰³ 同上、p.43

¹⁰⁴ 同上、p.44

¹⁰⁵ 座談会「大東亜文化圏の構想」（『国民文学』第二巻・第二号）、1942.2、p.54

させることを希望している¹⁰⁶。

そして、「大東亜文学」が記事として出てきたのが1943年10月号「大東亜文学建設のために」からである。これは、1943年8月に行われた第二回「大東亜文学者決戦会議」を受けてのものであり、これ以降、「大東亜共栄圏」内の文学を取り上げる論が次々と登場するようになる。第二回大会を「決戦会議」と銘打って戦争を意識させ、「大東亜共栄圏」の国々を結束させようと躍起になっているこの流れの背景には、尾崎秀樹が述べるように、第一回大会から第二回大会までの間に、アッツ島での日本軍守備隊全滅、ソロモン諸島の激戦、キスカ島撤退など日本の戦局がますます悪化していったことに対する「焦燥感」があったと思われる¹⁰⁷。

具体的に「大東亜文学建設のために」という記事では、満州代表の田平が「東洋の世界観の樹立を図ることによって、人類を頹廢に導く欧米文化の弊害を匡救すべき世界史的使命を果さねばならない」¹⁰⁸ので、「大東亜文学」を創ると述べている。さらに、同じ特集で蒙古代表とされている包崇新も「米英文化よりの解放」を訴え、「大東亜各地の文学者が、ひとしく東亜への帰心に還り、更にその向ふべき共同の自覚をもつて眞に団結し、共通の敵たる米英撃攘への覚悟を新たにすることこそ、今日の我々の任務」と述べている¹⁰⁹。ここからもわかるように、「大東亜文学」という「理想」文学は、戦争に向けて、「大東亜共栄圏」の存在感が増してきたことの表れである。

また、「大東亜文学」意識は、満州の作品を紹介する記事が多くなるなど、雑誌の掲載記事内容に影響を及ぼし続ける。例えば、1944年3月号に「満州の白系ロシア文学」、1944年6月号に「満州における鮮系芸文の動向」、1945年2月号には「満州女流作家群像」、「在満鮮系芸文界の昨今」などが掲載される。

以上のように、「大東亜文学」という理念は「大東亜共栄圏」内の各国文学者に日本を中心とした戦争協力体制を築かせることを目的として掲げられている。よって、「大東亜文学」の要件や題材が論じられ、文学自体の「理想」を表すというよりは、文学の名を借りて、戦争への意気込みや今後の戦争に向かう「理想」的体制を表すという性格が強いスローガンとなっている。これは「決戦文

¹⁰⁶ 田中梅吉「来るべき古典主義の文学—大東亜文芸復興の中核的構築として—」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12、pp.18-34

¹⁰⁷ 尾崎秀樹『近代文学の傷跡 旧植民地文学論』(同時代ライブラリー)、岩波書店、1991、p.27

¹⁰⁸ 「大東亜文学建設のために」(『国民文学』第三巻・第十号)、1943.10、p.144

¹⁰⁹ 同上、pp.146-147

学」と通じる特徴でもある。

ここで、振り返りとしての指導理念批判が登場する。今度は「決戦文学」登場後の「国民文学」についての批判である。例としては、「今春決戦文学の樹立を目指して朝鮮文人報国会の設立を見、夏には東都に大東亜文学者大会が開かれ多大の成果を挙げた」という「内外の情勢を念頭に置いて今年度の文壇を概観して見たい」とした上で、批判を試みる1943年12月号掲載の「決戦下文壇の一年」が挙げられる¹¹⁰。ここでは、二年目を迎えるにも関わらず、「国民文学は寧ろ最初の年よりも後退してゐると見る向が多い¹¹¹と述べている。その理由は、中堅作家が振るわないことである¹¹²。進退が激しいということが問題となっているのである。また、1944年2月号の評論でも、「今日の半島の国民文学が、何の意欲も、感興もそらぬ文字通りの無風静止状態に陥り、退嬰陳腐の途を跛行してゐるのは、蔽ふべからざる事実である¹¹³と酷評している。この段階においても、「国民文学」が「完成」している兆しは見られない。

1943年12月号巻頭言では宣戦の言葉を掲載¹¹⁴して、戦争二周年にあたって士気を高めようとしており、雑誌全体でも戦争色が濃厚になっていく。この状況下で第四の段階である「まつろふ文学」の生まれる素地ができる。天皇に対する意識をますます強め、戦争遂行に利用する意図があったと考えられる。

まず「まつろふ文学」の先駆けとして、「臣民文学」が登場する。1944年2月号で平沼文甫は、日本の文学は「臣民としての人間を創造する」、「臣民文学であるべき」と述べている¹¹⁵。そして続けて、「臣民文学の精神」とは、「仕奉の悲願、草奔の慟哭」であると述べている¹¹⁶。ここで「仕奉」という言葉が初めて出てくるのである。また、この語に関連する論文としては、「仕え奉る道」が次の3月号に掲載されている。ここでは、「仕へ奉る」という言葉の意味の解説がされる。具体的には、「仕へ奉る」とは「聖なるもの、尊きものに対して己が一切の力を捧げまつること¹¹⁷という意味だと説明している。

¹¹⁰ 石田耕人「決戦下文壇の一年—特に創作にみる—」（『国民文学』第三巻・第十二号）、1943. 12、p.10

¹¹¹ 同上、p.10

¹¹² 同上、p.12

¹¹³ 呉龍淳「新しき人間の形象化」（『国民文学』第四巻・第二号）、1944. 2、p.13

¹¹⁴ 「詔書（米英二対スル宣戦の大詔）」（『国民文学』第三巻・第十二号）、1943. 12、pp.2-3

¹¹⁵ 平沼文甫「思想的前進—国民文学から臣民文学へ—」（『国民文学』第四巻・第二号）、1944. 2、p.13

¹¹⁶ 同上、p.13

¹¹⁷ 宮原克一「仕え奉る道」（『国民文学』第四巻・第三号）、1944. 3、p.10

そして、1944年4月号でようやく「まつろふ文学」¹¹⁸が大々的に提唱される。この号では、具体的に理念の説明を試みている。まず「まつろふ」とは、「帰順と服従を意味する言葉」¹¹⁹であり、「日本の文学」は「伝統的にまつろふ精神を以て営まれてきた」¹²⁰と述べる。そしてこれは「大東亜文学」の前提となる、日本文学の精神、性質だと主張する¹²¹。つまり、「大東亜文学」の性質論をもう一度説明し、理念化したものが「まつろふ文学」なのである。しかし、「まつろふ文学は、天皇に仕へ奉る文学である」¹²²という崔載瑞の文章は「何の意味も持たない空疎な文章」であり、「そこには思想もなければ、およそ思考というに値いするものも」なく、ただ「ポーズ」があるにすぎないと川村湊は述べている¹²³。

新しい理念「まつろふ文学」が登場すると同時に、再び振り返りとして「決戦文学」への反省が出現する。1944年4月号「決戦文学の検討」の中では、「決戦文学」の唱えられた結果や、その混乱ぶりを指摘している。戦争激化の流れに対して、「従来の国民文学が持つ微温的な性格や、書齋派的な戯文家の軟精神が耐へられたものではない」からこそ、「戦意昂揚といひ決戦文学といふ掛声が文壇にも向けられた」にもかかわらず、「結局、書けない、の期待外れな嘆息を至る処で聴かされるのみだつた」と落胆している¹²⁴。ところが、「決戦文学」が「今後においても続けられることには何等支障は無いどころか、むしろ当然でさへある」¹²⁵と存在自体は否定していない。それどころか、「国民文学自体が戦争と共に産れた『戦ふ文学』であり」、「昨年を境目として決戦文学といふ戦争の性格を明らかにしだしたことは、段階的に見ても大きな発展」と肯定している。そして、「思想的な裏付けの乏しかつた決戦文学」に代わって、「まつろふ文学」、「文学に於ける仕奉精神」が「今後における文学運動の主潮」になることは「妥当」としている¹²⁶。だが、上記の川村の論で示したように「まつろふ文学」にも思想性はなく、結局うやむやのまま風化していくことになるのである。

「編集後記」が1944年3月号では一旦消失し、これ以降「編集後記」のスペースが狭まるという紙面の状況から、「まつろふ文学」出現後、物資不足など社会

¹¹⁸ 石田耕造（崔載瑞）「まつろふ文学」（『国民文学』第四巻・第四号）、1944. 4.、p.2

¹¹⁹ 同上、p.10

¹²⁰ 同上、p.17

¹²¹ 同上、p.17

¹²² 崔載瑞、前掲書、1944. 4.、p.3

¹²³ 川村湊『満州崩壊—「大東亜文学」と作家たち』文藝春秋、1997、p.23

¹²⁴ 山田栄助「決戦文学の検討」（『国民文学』第四巻・第四号）、1944. 4.、p.30

¹²⁵ 同上、p.32

¹²⁶ 同上、p.32

情勢のひっ迫した時代になっているのがわかる。実際、1944年6月のマリアナ諸島での大敗から日本の敗戦は決定的となり¹²⁷、いくら精神論でもがいたとしても新しい文学理念は空回りするだけであった。また「まつろふ文学」の理念が出現する前後から、様々なスローガンの「理想」文学の概念が次々に提案されていく。例えば、「皇民文学」(1943.10)、「皇道文学」(1944.4)、「神韻の文学」(1944.5)、「和合の文学」(1945.1)である。しかしこのようにスローガンが数多く唱えられても、具体性のないただの個人の主張となっており、『国民文学』や、朝鮮文壇全体の目標として大きく取り扱われることはない。そして「まつろふ文学」もまた、作家の意識の問題であり、具体的な作品を特定することは難しい。

最後の段階は、「生産文学」である。戦争が進むと配給制も始まり、物資不足が様々なところから叫ばれ、雑誌の紙不足も深刻になっていく¹²⁸。よって、生産関係の事柄が話題として取り扱われるようになるが、雑誌内では元々、生産と文学のことは語られてきていた。例えば、1943年1月号の対談では、崔載瑞が「生産拡充と文学の結び付きは非常に難しい問題」¹²⁹として、どのようにその二つを結びつけるかということを話し合っている。

だが、この生産と文学の問題はしばらく雑誌では語られず、「決戦文学」に気おされて姿を消してしまった。再び登場するのが、1944年7月号においてである。1944年は労働者不足で日本(内地)では女性や子ども、老人が法律で労働に駆り出され、朝鮮の人々も国民徴用令などによって動員させられるようになった時期である。また、時を同じくして日本(内地)文壇でも「生産文学」が流行しており、まさに1944年7月には日比野士朗が『生産文学』という本を出版している¹³⁰。よって「生産文学」の再登場は、社会や日本(内地)文壇の影響を多分に受けた結果だと推測される。

この7月号では、「生産面特集」と題した、生産に関する様々な論文、小説を集めた特集まで編まれる。「生産文学」提唱の目的は「一篇の文学作品がその機能を発揮して仮令一機なりとも飛機を増産することが出来、一粒の米でも余計生産することができ」ることとあり、「読者に働きかける影響力」、「効用性」の利用を目論んでいる¹³¹。「生産文学」には生産現場を描くという明確な題材があ

¹²⁷ 吉田裕、前掲書、2007、p.150

¹²⁸ 「文化陣営」(『国民文学』第三巻・第三号)、1943.3、pp.62-63

¹²⁹ 対談「文化と宣伝」(『国民文学』第三巻・第一号)、1943.1、p.82

¹³⁰ 池田浩士『『海外進出文学』論序説』インパクト出版会、1997、p.231

¹³¹ 時言(生産と文学)(『国民文学』第四巻・第七号)、1944.7、p.2

るので、作品例を挙げるができる。例えば、この特集で組まれた小説である清川士郎の「細流」や、奥平修一郎の「配給酒」である。

そして「生産文学」の理念が取り上げられた期間においても、振り返りとしての批判が登場する。具体的には、雑誌創刊当初から続いてきた理念である「国民文学」についての批判が現れる。ここで「国民文学」は、1945年の1月になっても「建設」¹³²をしており、まだ「過渡期」という評価を下されることとなる。

以上5段階の文学理念を通して見てきたが、必ずしも段階同士の境界が年代によって明確に区分されているわけではなく、前の段階の理念を批判しながら新しい概念を打ち立て、だからといって前の理念を捨てるのではなく盛り返していこうとしている。しかし末期になると色々なスローガンが乱立し、混乱状態になっている。この迷走状態を説明するために、「国民文学」はまだ「建設」途中であると、「過渡期」という言葉を使った言い訳で凌ごうとしているようである。

5. 朝鮮文学に関する問題

『国民文学』のもつ大きな問題として朝鮮文学との関連性がある。それはおもに朝鮮文学の位置づけ、朝鮮文学の題材、在朝鮮日本人作家の問題として取り上げられている。

まず、朝鮮文学の位置づけの問題である。ここでの朝鮮文学とは、日本の植民地支配が始まる時代から『国民文学』が創刊される植民地時代末期までのおおよそ40年ほどにできた近代文学のことであることは、暗黙の了解として文人たちにあるようである。もしくは朝鮮文学とは、植民地期以前の古典も含まれているかもしれないが、このあたりの定義は論議されておらず、ただ漠然と朝鮮文学としているようにも見える。

この従来の朝鮮文学は、日本と朝鮮の新しい国民文学という概念の中にどう取り込まれるべきか。この問題は、創刊号座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」で議論される。崔載瑞は、「今までの朝鮮の文学は朝鮮だけの文学として今日までやって来た。これからはもつと大きい日本文学の一翼として再出発するといふそこに実は非常に大きな問題があるのではないか」¹³³と問題提起をする。そし

¹³² 石田耕造「古丁氏に一満州国決戦芸文会談から帰つて一」（『国民文学』第五巻・第一号）、1945. 1、p.31

¹³³ 座談会「朝鮮文学の再出発を語る」（『国民文学』第一巻・第一号）、1941. 11、p.74

て、「今までに内地的文化になかった或る一つの新しい価値が朝鮮文化が転換したことによつて附加される」¹³⁴のでなければ、朝鮮文学の転換意義はないと語る。よつて創刊号以降、「朝鮮文学の滅亡を叫ぶ絶望論に対しても、尚又朝鮮文学を抹殺しようとする画一論に対しても左祖」¹³⁵せず、今までの朝鮮文学を活かすという方向性を主張することとなる。この意見は、崔や金鍾漢などの雑誌編集側や一部の朝鮮文学者たちの意見として繰り返される。1942年11月号の座談会「国民文学の一年を語る」では、朝鮮文学は「内地にない何ものかを創造して日本文化に附加して行くやうな役割」¹³⁶を持つ地方文学でなければならず、内地（日本）の真似では「半島の作家は存在理由がない」¹³⁷と話し合われており、1943年3月号の座談会「新半島文学への要望」でも、崔載瑞が同様の趣旨の意見を述べている¹³⁸。また、金鍾漢は1943年2月号掲載の座談会「詩壇の根本問題」にて、「郷土性といふものは日本文学、を作り上げる一つ一つの要素、単位になると思ふ」と述べ、「朝鮮といふ特殊性が日本といふ大きい普遍性に融けて行く」と、朝鮮文学の日本文学への同化を主張する寺本喜一に反対意見を挙げている¹³⁹。

朝鮮文学の価値を見いだそうとする文壇人に対する反対意見は、雑誌創刊時の座談会でもみられる。ここでは寺島、吉村という日本人が、「朝鮮的なものを日本文学に特別に追加しようとする意識を強調する必要はない」¹⁴⁰と主張している。なぜなら、朝鮮をあまり意識しすぎると「変なもの」¹⁴¹になるという不安を抱いているからである。この「変なもの」とは、日本に対する抵抗を意味するものと思われる。

この不安の背景には、「朝鮮文学を愛蘭文学に準へる向き」¹⁴²が一時流行したという事実がある。崔載瑞は、「愛蘭文学は成程英語を用ひてはあるが、精神は初めから反英的であり、英吉利からの離脱がその目標」なので、この考えは「危険」であると述べる¹⁴³。つまり、朝鮮が日本から独立しようとする思想を警戒

¹³⁴ 同上、p.78

¹³⁵ 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942.8、p.15

¹³⁶ 座談会「国民文学の一年を語る」（『国民文学』第二巻・第九号）、1942.11、p.93

¹³⁷ 同上、p.94

¹³⁸ 座談会「新半島文学への要望」（『国民文学』第三巻・第三号）、1943.3、p.4

¹³⁹ 座談会「詩壇の根本問題」（『国民文学』第三巻・第二号）、1943.2、p.14

¹⁴⁰ 座談会、前掲書、1941.11、p.79

¹⁴¹ 同上、p.82

¹⁴² 崔、前掲書、1942.8、p.15

¹⁴³ 同上、p.15

する風潮があったのである。

だが「ローカルカラー」¹⁴⁴（地方色）、特殊性・独自性の問題に対して、白鉄が1942年1月号の「古さと新しさ—戦時下の文芸時評—」にて、「特殊性を過まつて誇張しすぎたらそれが大きな危険を生じ悪結果を来たして日本文学の建設によくない影響を及ぼすことは先づ警戒すべきである」¹⁴⁵との主張が掲載されたにもかかわらず、崔は「朝鮮文学の独自性乃至獨創性を云ひ出したゞけで肝を潰す人がゐる」¹⁴⁶と述べ、さらに「それらの人々は時局に対する鋭敏を謳はれるよりは文化に対する短見を笑はれねばならぬ」¹⁴⁷と、神経過敏だと受け取っている。なぜなら、「朝鮮の作家や詩人が獨創性を持つことは日本文学の秩序を乱すことではなくて、その内容を豊富にする所以」¹⁴⁸であり、「それでこそ朝鮮文学の轉換も意義がある」¹⁴⁹からという、一貫した見解を持っているからである。

以上、地方色については懸念があるものの、朝鮮文学と日本文学の位置づけに関しては、「日本文学を一つの全体的秩序として見た場合、朝鮮文学が一地方文学である」¹⁵⁰という認識が定着するようになる。そして、朝鮮文学は従来の日本（内地）文学に同化するのではなく、かといって反抗心を含むほどの独自性を出すのではなく、日本の文学に新しい要素を加えるという、これから成長させていく国民文学への貢献という役割を雑誌編集側は見いだしている。

では「一地方文学」となる朝鮮文学は、九州文学など日本の他の地方文学とはどう違うのか。そして地方同士で比べたら、朝鮮文学はどのような位置にあるべきなのか。崔載瑞は、この点に関して次のように述べている。

朝鮮文学を論ずる場合、それを九州文学や北海道文学に準へる人が多い。勿論日本の地方文学として見ての話だらうが、その限りに於て間違つてみるとは云へない。然し両者は決して同列に列べらるべき性質のものではない。朝鮮文学は九州文学や東北文学や乃至は台湾文学等が持つ地方的特異性以上のものを持つ筈である。それは風土的に、氣質的に、従つて思考形式上からも内地とは異つてゐるばかりでなく、永い間の独自のな文学伝統

¹⁴⁴ 座談会、前掲書、1941.11、p.83

¹⁴⁵ 白鉄「古さと新しさ—戦時下の文芸時評—」（『国民文学』第二巻・第一号）、1942.1、p.84

¹⁴⁶ 崔、前掲書、1942.8、p.17

¹⁴⁷ 同上、p.17

¹⁴⁸ 同上、p.17

¹⁴⁹ 同上、p.17

¹⁵⁰ 同上、p.18

を背負つてゐるのであり、又現実にも内地とは異つた問題と要求を持つてゐる訳である。¹⁵¹

この朝鮮文学の伝統とは、前述のとおり、「諺文に依る新文学が創められてからでも四十年に垂んとする。そして幾多の作家と作品を擁してゐる」¹⁵²ということである。ここで朝鮮文学は、日本（内地）の地方文学とは歴史的にも文化的にも異なる背景があるために、単なる地方文学として扱うべきではないという考えが提示されている。

朝鮮文学がただの地方文学ではないと崔が主張するもう一つの根拠には、「新地方主義」という考えの提唱がある。「新地方主義」とは、「都会中心的」¹⁵³な考えをやめ、「地方に中央を建設してみやうとする地方人的な国民意識であり、文化運動、文学運動」¹⁵⁴であり、金鍾漢が1942年3月号の「一枝の倫理」で唱えた考え方である。つまり文壇の中央と考えられている東京も一地方と捉えることで¹⁵⁵、中央対地方としての地方文学ではなく、すべての地方文学を対等な中央の文学とするのである。よって朝鮮文学は地方文学になったとしても、東京文壇への追従をせずに独自に展開できることになる。この考えは前述で引いた1942年8月号の「朝鮮文学の現段階」でも、崔載瑞が、地方文学としての朝鮮文学を語る場合、「地方なる言葉には従来とは余程變つた解釈が下されねばならぬ」¹⁵⁶と、金の「一枝の倫理」から「新地方主義」論を引用し、次のように述べている。

地方に夫々文化的單位を設定すると云ふことは今後日本文化に課せられた最も重大なる課題の一つである。…〔中略〕…今度は国民文化の名に於いて或る種の形式主義が画一的に強制される危険がある。成る程国民文化は国民全体が支持し愛好し練磨すべき文化ではあるが、然しそれは一つの塊になつて存在するものではない。従つてそれを東京から京城へ運んで持つて来られると云ふ性質のものではない。…〔中略〕…国民文化が各地方に於て如何に解釈され、如何に具象化されるかは結局国民全体の批判的能力

¹⁵¹ 同上、p.14

¹⁵² 「内鮮文学の交流」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942.8、p.2

¹⁵³ 金鍾漢「佐藤春夫先生へ」（『国民文学』第二巻・第四号）、1942.4、p.74

¹⁵⁴ 同上、p.74

¹⁵⁵ 金鍾漢「一枝の倫理」（『国民文学』第二巻・第三号）、1942.3、p.36

¹⁵⁶ 崔、前掲書、1942.8、p.18

並に創造的能力に懸ることであつて、その意味に於ても各地方に文化的単位を設定しなくてはならぬのである。¹⁵⁷

崔は金鍾漢の「新地方主義」の考えに同調し、地方文学は中央に同化した画一的な文学になってはいけない、地方独自の文学を生み出すのだという意気込みを述べている。

以上述べた朝鮮文学への考え方は主に雑誌編集側の論であるが、これが朝鮮文壇全体の共通認識となっていたわけではない。地方文学としての朝鮮文学がどのようにあるべきか、各々に各々の「理想」のビジョンがあるため意見は対立し、文壇全体としては具体的実現できないどころか、肝心の目指すべき「理想」がまとまらない「過渡期」の段階にとどまっていたのである。

次は朝鮮文学の題材の問題である。『国民文学』が創刊され、国民文学としての朝鮮文学を書こうという実際の動きが出現してからは、個々の作品中に朝鮮の地方色問題が発生する。作家の中で、朝鮮の地方色を表現していこうとする流れを利用して地方色を売り物にしようとする態度が出てきたのである。なぜ売り物にするかという、朝鮮の珍しさが日本（内地）の人間に受けるからである。この行為は、「国民文学の健全な発達を阻害する」¹⁵⁸態度として以下のように批判されている。

朝鮮の地方色を出すのが悪いのではないそれを売物にするのが悪いのである。その心事が浅間しいのである。朝鮮の地方色を出すことに依つて朝鮮文学の独創性が生れるならそれに越したことは無い。たゞ衰つばい姿をして中央の文壇に媚びることだけはやめて貰ひ度い、又中央の文壇としても朝鮮文壇をして、地方色を売物にする見世物的存在たらしめてはならない。¹⁵⁹

また、前節で述べた「変なもの」になるという懸念から、地方色を出しすぎているとして批判される作品が実際に出てきたのである。1943年3月号の座談会「新半島文学への要望」では、崔がこの「郷土色」¹⁶⁰の問題を例を挙げて述べ

¹⁵⁷ 同上、p.19

¹⁵⁸ 「内鮮文学の交流」、前掲書、1942.8、p.3

¹⁵⁹ 同上、p.3

¹⁶⁰ 座談会、前掲書、1943.3、p.4

ている。

例へば国民文学で金史良君の「ムルオリ島」と云ふ作品を載せたことがあります、それが多分に郷土色を有つた作品で、一部では民族主義の残滓ではないかと見られたんです。それは決してさうぢやないと云ふことを力説して、それで通つて居るんですが、さう見られるか、見られないかと云ふことは、結局どうも矢張り書く当人の問題だと思ふんです。¹⁶¹

この発言に出てくる「ムルオリ島」は、1942年1月号の『国民文学』で掲載された金史良の小説である。時局や国策に関係なく朝鮮の土地や自然などの美しさを描いていることが特徴的なこの小説を、民族主義的な小説だと捉える批評家がいたのである。

さらに、朝鮮からの留学生が短編を書いて持ってくるが、なぜか余り朝鮮のことを書かないという話¹⁶²に対し、「書くことで面倒の所に触れては困るとか、何かさう云ふ懸念もない場合もない」¹⁶³と湯浅克衛が述べており、地方色が抵抗と見られることをまだ恐れている雰囲気がある。

上記座談会の議論は進むが、菊池寛は郷土色は出した方がいいと述べ¹⁶⁴、湯浅克衛は郷土色に捉われなくてもよい¹⁶⁵と主張し、結論が見えない。

では具体的にどのような地方色・特殊性を出していけばいいのか。地方色を出しすぎだと批判されもせず、かといって全く出さないのでもなく、バランスが取れる題材はないものかという題材の模索が始まる¹⁶⁶。

一つの解決策として歴史小説を書くことが挙げられるのは、『国民文学』誌上に趙容萬の「船の中」という小説が出てからのことである。座談会における「歴史小説是非」という話題の中では、賛否両論ではあるものの「船の中」の評価は比較的高く¹⁶⁷、これをきっかけに歴史小説の可能性が論じられていく。

高評価の理由は、今までの懸念を払拭することにある。まず、朝鮮の歴史上の人物を書くことで朝鮮色を出すことができる。かつ朝鮮と日本の交流を描く

¹⁶¹ 同上、p.4

¹⁶² 同上、p.6

¹⁶³ 同上、p.9

¹⁶⁴ 同上、p.6

¹⁶⁵ 同上、p.7

¹⁶⁶ 座談会「明日への朝鮮映画」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12、pp.78-79

¹⁶⁷ 座談会、前掲書、1942.11、p.95

ことで、神話の利用と同様に、昔からの両国の結びつきを説明し、「内鮮一体」を進める現在の動きを正当化できる。批判される可能性は低く、国策にも貢献できる題材となっているのである。

歴史小説の評価は以後変わらず高い。1944年4月号の「文芸時評」の筆者田中正美は、南川博の歴史小説「金玉均の死」(1944年3月号掲載)について絶賛し、「どし、かうしたものは出てい、」¹⁶⁸と述べている。

しかし歴史小説がよいからといって、皆が皆歴史小説を書くとなっては題材に偏りが出てしまう。実際『国民文学』誌には、朝鮮の歴史上の人物や事件、場所を登場させる文学は、創刊号から終刊となる1945年5月号まで、「船の中」、「エミレエの鐘」、「太白山脈」、「金玉均の死」、「非時の花」、「民族の結婚」の6作品しか載っておらず、歴史に題材をとった作品ばかりが掲載されているわけではない。よって歴史小説以外の方法で、朝鮮の特殊性を国策にも合うように作品に反映させることが重要となるが、明確な解決法は見いだされない。結局地方色の問題は完全に解決することなく続いていったと思われる。

最後に、朝鮮在住の日本人作家に関する問題である。彼らは植民地である朝鮮に出向き朝鮮文壇で作家活動を行なうが、彼らの文学は果たして朝鮮文学となるのだろうか。また、日本人作家がどのようにふるまえば朝鮮文学となりうるのか。このように「朝鮮在住の内地人作家」の存在は、朝鮮人作家たちに波紋を呼ぶ。まず1942年11月号「国民文学といふもの」では、次のように疑問を呈している。

朝鮮文学と云へば、半島人の生活や感情などを主題にしたものが主流をなすと考へられるが、…〔中略〕…そんなのは内地人作家にとつては、やはり難題である。で、朝鮮に於ける内地人の生活といつたものが、これらの作家の主な題材となるのぢやないかと思はれるが、すると、これらの作家は、いつまでこんな「朝鮮に於ける内地人」といつた局限された世界に躊躇としてゐられるのかといふ疑問が起る。恐らくそんな必要も必然性もないのではあるまいか。つまり、これらの作家にとつて朝鮮は、中央へ進出するための踏台でしかないといふことになる。…〔中略〕…さうなるとそれらの作家の文学を、果して朝鮮文学と呼べるかどうか疑問になる。恐

¹⁶⁸ 田中正美「文芸時評—『私』の現はれ方を中心として」(『国民文学』第四巻・第四号)、1944. 4. p.46

らく単に「朝鮮在住の作家」といふことになるのではあるまいか。もつと極端になると、作家として一人前になれば、住居まで中央へ移してしまふのではあるまいか。そこまでゆけば、もう「朝鮮文学」もへちまもあつたものでない。¹⁶⁹

この問題に関して金鍾漢は、座談会にて、「半島の地理に安心立命しようとする内地人の作家」は、「半島の生活に徹する覚悟で加はつて」もらわないと「意味がない」と主張する¹⁷⁰。そして、「もし半島の土に徹する勇気がなければ、やはり東京でやるべき」と、朝鮮文学と日本人作家の立ち位置を述べている。この発言に関して川村湊は、「時局便乗型の国民文学」に対しての「ささやかな抵抗精神」の現れであるとし、金が「田中英光のような“出稼ぎ的文学者”」を批判していると分析している¹⁷¹。

また崔載瑞は、日本文学に新しい要素を導入するだろう¹⁷²として佐藤清を紹介し、「在鮮内地人作家詩人の職域」が「重要性を増してきた」¹⁷³と述べており、朝鮮内の日本人作家の存在にも意義を見出している。

しかし崔の上記論考の次に、田中英光が「朝鮮を去る日に」（1942年12月号 p.94～）を発表¹⁷⁴しており、理想と現実が離れている。

実際、田中英光が日本へ帰ったことについて、崔は1943年2月号の座談会にて、「半島に於ける内地人作家の落付なさが気になる」¹⁷⁵と話題に出している。なぜなら、「結局東京に居つても書けるやうな文学では大して意味がない」¹⁷⁶と考えているからである。この問題提起後は、今現在実際に体験している朝鮮を書かなければ朝鮮文学としての価値はないので、朝鮮に居た方が望ましいと考える文人と、朝鮮を去ったとしても朝鮮のことを書けば朝鮮文学であるとする文人とで分かれていく¹⁷⁷。しかしこの議論に関して金村龍濟（金龍濟）は、そもそも「文学に於ける題材の問題と、朝鮮文学そのものに対する観念」の問題

¹⁶⁹ 俞鎮午「国民文学といふもの」（『国民文学』第二巻・第九号）、1942.11、p.14

¹⁷⁰ 座談会、前掲書、1942.11、pp.93-94

¹⁷¹ 川村湊『〈酔いどれ船〉の青春—もう一つの戦中・戦後』講談社、1986、p.80

¹⁷² 崔載瑞「詩人としての佐藤（清）先生—『碧靈集』の出版を機として—」（『国民文学』第二巻・第十号）、1942.12、p.86

¹⁷³ 同上、p.88

¹⁷⁴ 田中英光「朝鮮を去る日に」（『国民文学』第二巻・第十号）、1942.12、pp.94-99

¹⁷⁵ 座談会、前掲書、1943.2、p.13

¹⁷⁶ 同上、p.13

¹⁷⁷ 同上、pp.13-17

とは異なると主張する¹⁷⁸。

ここでは結局意見の分かれたまま別の話題へと入っていき、明確な結論が出ずに終わってしまう。そして、この座談会では朝鮮に居るべきだという意見に同調していた佐藤清¹⁷⁹も、1945年2月号に「氷窓に倚りて」という文を載せて朝鮮を去る¹⁸⁰。

この問題は『国民文学』誌ではほとんど論議されずに終わってしまう。むしろ、1945年2月号に川端周三の「佐藤清と朝鮮詩壇」のように、遠く日本へ帰っていく作家を称賛する言葉を掲載する¹⁸¹など、矛盾している。

以上見てきたように、議論が平行線に終わり結局結論の見えない様子が、朝鮮文学に関することにおいても同様であることが窺える。そして朝鮮文学をどのように扱っていくかという問題は、これだけでは終わらない。朝鮮語を使って書くのか、日本語を使って書くのかといった言葉に関する葛藤も絡んでいるからである。これらの問題については稿を新たに論じる。

6. おわりに

雑誌『国民文学』の主幹崔載瑞は、「今次の大東亜戦争」は「文化創造戦」と述べている¹⁸²。このとおり雑誌刊行当時の日本は、各国を巻き込み「大東亜文化」という「理想」の文化構築に向けて進んでいる最中であり、文学にも様々な「理想」を要求した。

しかし文学者たちは、肝心のその「理想」文学を具体的に示すことができない。よって「理想」に向かう方法もわからず、実現しなければならぬという圧迫感のなか、失敗を繰り返す。

この状態は、文学の政治性、芸術性を語る場合も、文学の指導理念を議論する場合も、朝鮮文学について論じる場合も、同じである。文学の性質を時局に利用したいという願望はあるものの、活用法に最善策は見つからない。また、文学の指導理念は社会状況に影響され頻りに打ち立てられていくが、実際の作品が指導理念を体現できないどころか、その理念自体の定義が確立されない状

¹⁷⁸ 同上、p.15

¹⁷⁹ 同上、p.16

¹⁸⁰ 佐藤清「氷窓に倚りて」(『国民文学』第五巻・第二号)、1945.2、pp.20-21

¹⁸¹ 川端周三「佐藤清氏と朝鮮詩壇」(『国民文学』第五巻・第二号)、1945.2、pp.22-27

¹⁸² 崔載瑞「文芸時評—私の頁—」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942.4、p.36

態となる。結局「国民文学」とはどのような作品であればよいのか、不明のままである。さらに、従来の朝鮮文学は国民文学としてどう変化していくべきなのか、方向性はまともらなかった。

この漠然とした「理想」的文学を一つにまとめ、皆が満足する形で実現するためには多大な労力と時間が必要であり、一足とびに達成することはできないという認識はある。しかし、そこに向かって努力しなければならぬにも始まらない。彼らはその努力期間を「過渡期」という言葉で説明する。そして自らが打ち立てた目標への取り組みが上手くいかないことを、「過渡期」だから達成できないという論理ですべて納得している。つまり、そこへ向かっているという努力自体が重要なのである。

だからこそこの「過渡期」は、いつまでも「過渡期」として終焉を迎えることとなる。そして雑誌自体は方向性を模索する多大な努力にもかかわらず、何かを達成することなく、何かを成果として残すこともなく、中途半端に立ち消え、結果的には朝鮮文壇人の空しい徒労が「親日」という汚名の中で膨大に記録されることになったといえる。

【付記】 本論は松下玲音氏の卒業論文の一部として書かれたもので、南富鎮は指導過程において助言や資料提供などを行ったにすぎない。おおむね松下玲音氏の業績とみなしてよい。